

大阪経済大学・大学院

人間科学研究科 臨床心理学専攻 修士課程

＜臨床心理士 第一種指定大学院＞

＜公認心理師 養成機関＞

目次

1. 教育目標	2
2. カリキュラム	2
3. 特長的な領域	6
4. 研究指導（修士論文）	7
5. 入試情報・臨床心理士/公認心理師 資格試験の合格率	9
6. 修了生の就職先	10
7. 大学院の雰囲気について	11
8. 臨床心理士・公認心理師の資格をもつ専任教員の紹介	12
9. 心理臨床センター	25

1. 教育目標

「志の高い臨床家」―臨床心理士／公認心理師を養成する

これが本学の教育目標です。入学した皆さんには、2年の学修期間を通して、「志の高い臨床家」になるための基盤を固めてほしいと思っています。

そのために、講義・演習科目はもちろん、豊富な実習と、実習での体験を確実に身にできるための臨床指導の体制を備えています。

2. カリキュラム

(1) 講義・演習

公認心理師、臨床心理士の受験資格に必要な科目は、当然すべて開講しています。講義・演習は、各領域、各分野での実践が豊富な専任教員が主に担当し、実践例のエッセンスに触れながら、臨床実践との結びつきがイメージしやすい授業を展開しています。また、客員教授等も臨床実践が豊富で、臨床家としての力量を高く評価されている先生方を招聘しています。

(2) 実習関連科目

志の高い臨床家になるためには、一人ひとりのクライアントにしっかりと向き合い、「治療的に聴く能力」を身につけること、クライアントとの関係性を軸にアセスメントすることが大切です。そして、そのためには、まずは自分自身にしっかりと向き合うことが必要となります。実習関連科目では、これらのことを積み重ねとしてきちんと学べるようにしています。

① 事前学修（臨床心理基礎実習）

実習の基礎となる事柄を学びます。具体的な内容は、主に次のとおりです。

i ロールプレイ

院生同士が、クライアント役とカウンセラー役になって模擬の心理面接を行います。

カウンセラー役は、傾聴をはじめとする心理面接の基本的な技能について練習します。また、クライアント役は、心理面接で体験するクライアントの気持ちを理解する体験になり、自身がカウンセラーになった時に必要とされる共感的理解の能力を修得していきます。

また、ロールプレイ後の振り返りは、ケースが模擬とはいえ、実際の事例検討と何ら変わりのないものになっています。院生にとっては、陪席同様、目の前で見たばかり、あるいは、演じたばかりのケースについて、臨床的に学べるライブ感のある事例検討の機会になっています。

ii 陪席実習

1年・春学期から、内部実習の施設である「心理臨床センター」で、実際のインテーク面接に陪席をします。陪席を通して心理面接の場面に慣れるとともに、心理面接におけるカウンセラーの役割や機能について学んでいきます。

② 外部実習（臨床心理実習Ⅰa・Ⅰb）

1年・春学期から2年・秋学期の2年間を通して行う外部の施設での実習と、それに関する事前・事後

学習を行います。

外部実習先は、「教育」、「医療」、「福祉」の3領域の施設があり、実習は、毎学期（約半年間）1箇所の施設で毎週1日行い、在学中計4か所の施設を経験します。

実習への参加にあたっては、各施設の特徴や実習生としての心構え、倫理的態度などに関する事前学習を行います。

また、実習参加後は、実習が単なる体験で終わることのないよう、ディスカッションを通じた指導により、援助における効果的な見立てと介入の方法について学び、体験の内容が確実に定着するよう、グループ形式での振り返りを行います。

＜実習スケジュール＞

	1 年		2 年	
	春学期	秋学期	春学期	秋学期
外部実習	医療機関 教育機関 福祉機関	医療機関 教育機関 福祉機関	医療機関 教育機関 福祉機関	医療機関 教育機関 福祉機関
内部実習	インテーク面接陪席			
		ケース担当		

（最初の3学期で、各領域1箇所ずつで実習し、最後の1学期は、希望する領域の実習を行う。）

＜外部実習先について＞

外部実習先は、各領域とも複数、全部で20箇所以上あります。院生は、その中から、希望の実習先を選択して参加します。

(1) 教育領域

（提携機関）

- ① 大阪市立大隅西小学校 ② 瑞光中学校 ③ 瑞光幼稚園 ④ 瑞光第二幼稚園
- ⑤ 吹田市立教育センター教育支援教室（不登校児童・生徒支援事業）
- ⑥ 大阪府立むらの高等支援学校

実習先は、幼稚園、小学校、不登校児童・生徒の支援施設などです。

情緒面・行動面で問題をもつ子どもたちの支援をしながら、援助的な関わりかたを学びます。同時に、さまざまな年齢の特に問題をもたない子どもたちを身近に把握することもでき、発達について学べるようにしています。また、専門の心理職が発達検査や知能検査などを行う現場を見学することによって、その技術を学ぶこともできます。さらに、実習先によっては、スクールカウンセラーや特別支援教育担当の教諭と協働し

ながら実習を行い、職種間の連携・協働について学ぶことができます。

将来、スクールカウンセラー、キダーカウンセラー等の領域に進む院生にとって有益な経験であるのはもちろんですが、どの領域に進む院生にとっても、こころの発達の重要な時期である子ども期の臨床にたずさわることは、人間への理解を深める有意義な経験になります。

(2) 医療領域

(提携機関)

- ① なにわ生野病院 心療内科 ② 清水クリニック ③ 京都桂病院 ④京阪病院
- ⑤ 丹比荘病院 ⑥ 幸地クリニック ⑦八尾こころのホスピタル ⑧そのだクリニック

実習先は精神科、心療内科、あるいは総合病院などの施設です。

実習先によっては実習の内容に違いがありますが、患者さんの予診、集団精神療法への参加、心理療法の見学、精神障害をもつ方々のデイケアでの支援を行います。また、精神科の患者さんとその家族の援助に携わることもあり、精神疾患のありようと診断、患者さんのサポートと治療について、医療領域で実践的な学びを深めることができます。

医療領域は、臨床心理士／公認心理師が活躍する主要な領域の一つです。精神疾患についての生きた知識を得ることは、将来、他の領域で仕事をする場合も有益です。

(3) 福祉領域

(提携機関)

- ①児童心理治療施設ひびき ② 地域活動支援センターこころの相談室リーフ ③ すみれ乳児院
- ④枚方市 ひきこもり等子ども・若者相談支援センター
- ⑤NPO法人 女性と子育て支援グループpokkapoka ⑥ ワークセンター豊新
- ⑦ 自立訓練（生活訓練）・就労移行支援事業所ライフリズム
- ⑧ 児童発達支援センター守口市立わかさ・わかすぎ園
- ⑨ 堺市子ども相談所
- ⑩ 堺市ユースサポートセンター

実習先は、乳児院、児童心理治療施設、地域活動支援センター、知的障害者支援センター、児童相談所、子ども若者総合相談センター、子育て支援施設などです。

実習先によって違いはありますが、実習では、グループワークや障害者のデイケアに参加します。また、乳児院では人生最早期の対人関係を観察することができます。成人の施設では精神保健福祉士など福祉の専門家と協働して、利用者の方々のニーズに応えていく臨床経験を積むことができます。

福祉領域は、今後、臨床心理士／公認心理師の活躍がさらに期待されている領域です。

③ 内部実習（臨床心理実習Ⅱ）

内部実習では、心理臨床施設である人間科学研究科附属「心理臨床センター」で、実際に心理検査や心理療法を行うことで、1年・秋学期から2年・秋学期にかけて、実際のケースを担当します。

直近4年間の院生が担当したセッション数は次のとおりです。

年度	セッション数
2021年度	1,457セッション（うち大学院生・研修員がおこなったのは、610セッション）
2022年度	1,451セッション（うち大学院生・研修員がおこなったのは、646セッション）
2023年度	1,622セッション（うち大学院生・研修員がおこなったのは、835セッション）
2024年度	1,625セッション（うち大学院生・研修員がおこなったのは、781セッション）

本学の院生の数は、21年度が10名、22年度が12名、23年度が14名、24年度が11人ですので、院生一人当たりが担当したセッション数は、かなりのものになり、日本の修士課程の中では、充実しているといえるでしょう。

他にも、不登校の子どもたちのサポート、親子関係を援助する活動もありますので、実践力を確実に身につけることができます。

担当事例については、ケースカンファレンス（臨床心理実習Ⅱ）での発表・検討を通して指導を受けます。

ケースカンファレンスは、複数の教員で担当しています。カンファレンスの参加者は、院生、担当教員の他、大学院を修了してセンターのケースを担当している研修員（修了生）も参加します。また、院生が担当しているケース事例に加えて、研修員が担当しているケースの検討もあります。

教員がコメントするばかりでなく、院生同士、研修員、教員がオープンな雰囲気の中、その後の実践活動がよりよいものになるようにディスカッションしています。

v 外部スーパーヴィジョン制度

内部実習で行った心理検査や心理面接について、学外の指導者（スーパーヴァイザー）から定期的に指導（スーパーヴィジョン）を受けます。

2025年度にスーパーヴァイザーとして提携したのは以下の方々と、いずれの方も、さまざまな現場での臨床経験豊かな優秀な臨床家です。院生は、この方々から一人を選び指導を受けます。

<2025年度に提携したスーパーヴァイザー>

（大阪）

- ・竹内道子先生（吹田市立教育センター）
- ・東齊彰先生（甲子園大学心理学部）
- ・佐野正剛先生（大阪メンタルサポートオフィス）
- ・村上佐智子先生（大阪府衛生会付属診療所）
- ・武藤誠先生（むとう心理療法オフィス）
- ・村田りか先生（八尾子どものこころ心理相談室Sila）
- ・日下紀子先生（関西心理センター・谷町こどもセンター）
- ・二宮一美先生（くるみ心理オフィス）

（京都）

- ・濱田智崇先生（京都橘大学心理学科）
- ・菊地寿奈美先生（京都市スクールカウンセラー・立命館大学非常勤講師）

（兵庫）

- ・石野泉先生（西宮カウンセリング研究所）
- ・古宮昇先生（カウンセリング・ルーム輝）
- ・三船直子先生（大阪市立大学名誉教授）

3. 特長的な領域

本学の特長として、「子ども心理臨床」、「集団精神療法」に力を入れていることがあります。以下では、その概要を説明します。

(1) 子どもの心理臨床

鵜飼奈津子教授を中心に、英国における実践と知見を取り入れ、子どもと家族のための精神分析的アセスメントと心理療法を行っています。

心理臨床センターでは、従来の相談に加えて、『発達相談サービス』を行っています。一般的な発達相談では、1回の発達検査の実施とその結果に対するフィードバックのみで終結してしまいがちであったり、フォローアップグループへの参加など、集団療育を重視するようなアプローチにとどまりがちであったりすることが多いのが現状です。しかし、このサービスではさらに踏み込んだ精神分析的行動観察を基本にした発達の見立てと理解を提供することを目指しています。

また、このサービスは、公認心理師の受験資格に必要な「心理実践実習」の一つとして、「地域発達相談実習」という科目と連動しています。そこで、大学院生はこのサービスに特化したインテーク会議、および事例検討会に参加する機会を得ます。また、本サービス専任の臨床心理士・公認心理師や教員が実際に面接を行う場面に陪席したり、その詳細な記録を検討したりする中で、初心者の大学院生も子どもの行動観察によるアセスメントの技術を習得していくことを目指します。同時に、大学院生は学外においても精神分析的知見のあるスーパーバイザーからスーパーヴィジョンを受けたり、乳児観察の体験や精神分析的な心理療法に関連するセミナー等に参加したりすることも奨励されており、将来の臨床の基礎となるよう、学内外で多くの体験をする機会が与えられるような多彩なプログラムが準備されています。

(2) 集団精神療法

集団精神療法は、集団の中で対人関係における不適応をきたした個人が、治療的に構造化された安全な集団の中で自分と他者、あるいは全体としての集団との関係を認識し、それを変容させ、成長・回復につなげることを可能とするアプローチです。

また、集団精神療法は、援助者が自分自身について覚知できる領域を深め広げるトレーニングとしても有用です。グループでのメンバー体験を通して、他者との関係の中で自分にどのような感情や感覚が生じているかを見つめ、言語化する力をつけること、同調・協調だけで終わるのではなく、時には痛みを伴うコミュニケーションにも直面化することは、個人療法、集団療法にかかわらずクライアントへの援助にかかわる臨床心理士/公認心理師には肝要です。

このように集団精神療法は、様々な場面で用いられていますが、現状では、臨床心理士/公認心理師養成課程カリキュラムの中で十分な教育を提供できる場所は多くないと思われます。

本学教授の古賀恵里子は、日本集団精神療法学会認定グループ・サイコセラピストであり、2007年にはスーパーバイザーの認定を受けました。また、精神科病院における長年の臨床経験の中で、統合失調症やアルコール依存症の患者さんへの集団精神療法、聴覚障害のある患者さんへの手話を用いた集団精神療法などを精神科医、看護師、精神保健福祉士と協働しながら実践してきました。

さらに、臨床現場全体の環境が治療的に機能するための集団を用いたアプローチとして治療共同体についての研究や実践にも取り組んでおり、イギリスやイタリアの実践からも学び続けています。

本研究科のカリキュラムでは、「集団精神療法特論」で集団精神療法や治療共同体について学ぶ機会をもちます。グループにおけるメンバー体験については、学外での研究会や学会等での体験グループの情報を提供し参加を推奨します。

4. 研究指導（修士論文）

入学時に指導教員が決まり、2年間かけて、研究（修士論文作成）に取り組めます。2年・秋学期に行われる修士論文中間報告会の検討を経て、2年次の1月に論文を提出し、2月に最終試験を迎えます。

修士論文の審査は主査（1名、研究指導教員）と副査（2名、研究科教員、他機関所属の専門家）によって行われます。

<過去の修士論文タイトル（一部抜粋）>

- **心理療法のプロセスやセラピスト－クライアント関係に関する論文**
 - ・援助者の内的感覚を意識化することに関する考察－触媒としての身体－
 - ・初心治療者が自分の内面に起きてくることからどう学んでいけばいいのか
 - ・クライアントとセラピストとのつながりを支えているもの－共感・間主観性・共存在－
 - ・対人援助者がもつ未解決の心理的問題への対処に関する検討－がん患者の支援を通して－
- **子どもの成長・発達や家族関係に関する論文**
 - ・児童養護施設におけるライフ・ストーリー・ワーク－施設職員への調査
 - ・児童養護施設における臨床心理学的アプローチ～個人心理療法と生活場面での関わりの検討～
 - ・子どもの攻撃性が建設的に表出されるために必要な内的および外的資源の研究
 - ・不登校をめぐる親子関係改善への提言－親子のインタビューから見たもの－
 - ・自閉を伴う知的障害をもつ子の父親の体験と心理変容について
 - ・和太鼓の集団練習と子どもの社会性の発達に関する一考察－その心理療法的側面と新版K式発達検査から見た発達課題－
 - ・地域における子育て支援と一次予防－NPO法人Xにおける二児の行動観察から－
 - ・乳児院における乳児の精神分析的観察の一例
 - ・日本の学校におけるいじめ防止プログラムのあり方について
 - ・学習塾における心理的支援のあり方についての一考察
 - ・学童保育所における自閉症児に対する治療的観察の試み－タビストック方式乳児観察を応用した観察から－
 - ・保育所における配慮が必要な子どもの理解と支援－新人保育士に対して臨床心理士が貢献できること
 - ・日本と中国における自閉症スペクトラム障害をめぐる現状と課題
 - ・特別支援教育において教員が抱える困難さと困り感に関する質的研究－小学校の通常学級に在籍する知的障害を伴わない発達障害を持つと思われる児童に対する支援－
 - ・育児不安を持つ母親に対する支援－子育て支援において臨床心理士ができること－
 - ・児童福祉施設における職員の関わり
 - ・発達および集団に関する理論と小学校の現場における一考察
 - ・不登校経験の意味づけとその過程

- ・子ども虐待の周産期からの予防的支援
- ・放課後事業所の支援員に対して心理士が貢献できること
- ・親の養育が子どもにおよぼす影響-発達相談サービスにおけるPNPSを活用した事例を用いて-
- ・発達障害がある子どものコラージュ制作体験と自己理解の検討

○ 青年期をめぐる問題に関する論文

- ・大学生の昼食時間に関する不安をめぐる一考察－自己愛の2つの型の視点から
- ・大学生におけるソーシャルスキルと社交不安との関連
- ・自分がないという状態に関する一考察
- ・大学生における強迫傾向と完全主義、自己受容・他者受容の関連
- ・不安定型の成人アタッチメントが怒りコーピングに与える影響
- ・思春期における障害者「きょうだい」の葛藤とその変容過程

○ ジェンダーや女性性・男性性に関する論文

- ・不妊治療中の女性の自尊感情に影響を与える要因について
- ・異性愛社会におけるゲイ男性のアイデンティティ研究
- ・セクシュアリティの形成と再構築に関する研究
- ・統合失調症の子を介護する中で親がたどる心理的プロセス
- ・女性が子どもを産まない選択をするにいたるプロセスについて
- ・自分の存在に罪悪感を持つ女性の臨床心理学的研究

○ 精神保健領域の問題に関する論文

- ・統合失調症のピア(Peer)サポートの実際－精神分析理論における一考察－
- ・摂食障害の特徴と治療の工夫－治療者へのヒアリング調査より－
- ・過敏型自己愛の養育環境についての検討
- ・「新型うつ」の特性評価に関する研究
- ・派遣労働者におけるワーク・エンゲイジメントと職業性ストレス諸要因の関連
- ・職場におけるハラスメントとメンタルヘルスに関する研究
- ・医療リワークで臨床心理士に必要な視点
- ・「新型うつ」の発症要因の究明とその対応
- ・アルコール依存症者が抱える生きづらさとその心理的回復支援について
- ・医療リワークにおける心理職の実践と課題－集団としての利用者とのかわりに焦点を当てて－
- ・社交不安症者が参加するセルフヘルプ・グループに対する専門職の関わりについての検討

○ その他

- ・「コンステレーションワーク」における心理臨床学研究
- ・マインドフルネス傾向と公的・私的自己意識及び脱中心化の関連についての考察
- ・四国遍路におけるお接待と自己変容の研究
- ・マンダラに関する臨床心理学的研究－面接場面にマンダラのダイナミクスを観察する－
- ・震災が被災者にもたらす心理的影響－心理的支援と臨床心理士の活動－
- ・分析心理学と中医理論における中医心理学の文献研究
- ・セルフコンパッションが不定愁訴と自己成長主導性へ与える影響－身体感覚の認知とレジリエンスを媒体としたモデルの検討－

・システマティックレビューによる音楽療法の感情変化の評価

5. 入試情報 ・ 臨床心理士/公認心理師 資格試験の合格率

(1) 入試情報

入学試験は9月と2月にあり、試験は、筆記及び面接です。

筆記試験は臨床心理学の専門科目と英語（辞書参照可・当日貸与）です。

英語の試験は英文の意味の理解の程度をみます。専門科目の試験では、細かな知識というよりも、臨床心理学の重要な事柄についての理解の程度と、自分自身の意見・考えを分かりやすく述べることができるかどうかをみています。

過去の問題については、本学入試部に問い合わせてください（06-6328-2431）。

面接試験は、受験生一人ひとりのことをよく知るとともに、受験生に本学のことをよく知ってもらう機会と捉え、受験生1人につき約20分かけて丁寧に行っています。

大学院説明会は毎年7月頃と12月頃の年2回開催しています。

詳細は本学ホームページで確認してください。（「大阪経済大学 臨床心理学専攻」で検索してください。）

なお、2020年度から学内特別入試の制度、2021年度から推薦入試の制度を始めました。詳しくは大学院入学試験要項を参照してください。

本学の教育目標は、「志の高い臨床家」を育てることですが、研究も大切にしています。臨床実践と研究の両方に高い関心をもつ院生はもちろん大歓迎です。

＜過去の入試状況（志願者数、合格者数、入学者数）：定員10名＞

年 度	志願者数	合格者数	入学者数
2016	28名	8名	7名
2017	24名	5名	5名
2018	23名	6名	6名
2019	12名	3名	3名
2020	22名	7名	5名
2021	20名	6名	5名
2022	16名	8名	8名
2023	29名	8名	7名
2024	30名	7名	6名
2025	34名	9名	7名

(2) 臨床心理士・公認心理師試験

臨床心理士試験・公認心理師試験については、受験を支援しています。臨床心理士の本大学院修了生の合格率は、**83.9%**—総受験者数**87**のうち**73名**が合格—となっています（全国の平均合格率は約65%）。また、同じく公認心理師の合格率は、**81%**—総受験者数**81名**のうち**66名**が合格—となってい

ます（全国平均合格率は60.5%）。

6. 修了生の就職先

修了生の多くが常勤あるいは準常勤の職を得ています。

総合病院、精神科クリニック、精神科病院、ペインクリニック、心療内科医院、緩和ケア、法務省、児童福祉施設、公立教育センター相談室等の臨床心理士、スクールカウンセラー、キダーカウンセラー、大学非常勤講師などとして活躍しています。他大学の博士課程に進学した修了生もいます。

<修了生の就職先一覧（一部抜粋）（2025年現在）>

(1) 医療機関

（精神科・心療内科医院）

平井クリニック、かねこクリニック、みなともクリニック、かく・にしかわ診療所、こころのクリニックなごみ、やましたクリニック、けいふう心療クリニック、京都民医連太子道診療所、富家千葉病院、フェルマータ・メンタルクリニック、くぎぬき医院、かえでクリニック、こころの里クリニック、藤花会ふじおかクリニック、アネモネ子どもクリニック

（単科精神科病院など）

洞仁会 洞爺湖温泉病院、大阪府済生会 吹田病院、関西リハビリテーション病院、有光会 サトウ病院、弘道会 なにわ生野病院、丹比荘病院、恵風会 高岡病院、貴生会 和泉中央病院、万葉クリニック

（総合病院）

大阪府立精神医療センター、明石市立市民病院、箕面市立病院、地域医療機能推進機構 諫早総合病院、河内友誼会河内総合病院、岡崎市民病院、大阪市立総合医療センター

(2) 教育機関

（大学、その他）

大阪経済大学・心理臨床センター・進路支援センター、
大阪経済大学人間科学部・大学院人間科学研究科非常勤講師、
夙川学院大学学生相談室、関西学院高中部相談室、明治国際医療大学非常勤講師、
大阪成蹊大学非常勤講師、大阪成蹊短期大学非常勤講師、明治東洋医学専門学校非常勤講師、
神戸親和女子大学非常勤講師、平安女学院大学非常勤講師、大和大学非常勤講師、大阪公立大学、
頌栄短期大学、放送大学兵庫学習センター、奈良県立病院機構奈良看護大学校、神戸女子大学、
神戸総合医療専門学校、大阪府病院協会看護専門学校

（教育委員会関連）

伊丹市総合教育センター、高槻市教育センター、茨木市教育研究所、豊中市教育センター、熊取町教育委員会、東大阪市教育センター、滋賀県教育委員会

（スクールカウンセラー・キダーカウンセラー）

大阪市、大阪府、大津市、大阪府立支援学校、単位制・通信制高校、兵庫県立高校、NHK学園高等学校、関西学院高・中部

大阪府私立幼稚園など

（相談員）

追手門大学地域支援心理研究センター、神戸大学保健管理センター、谷町こどもセンター、関西心理センター、

御池心理療法センター、カウンセリングオフィス神戸同人社、株式会社東京リーガルマインド、京都工場保健会、

(3) 福祉機関

(児童福祉施設)

武田塾、羽曳野荘、遙学園、尼崎市尼崎学園、南河学園、常照園、すみれ乳児院

(発達障害支援関連)

聖ヨハネ学園、高槻市立障害者福祉センター、大阪福祉事業団 豊里学園、大阪府知的障害者育成会
守口市わかさ・わかすぎ園、株式会社関通教育事業部

(公的機関関連)

大阪市こども相談センター、大阪府子ども家庭センター、京都府立こども発達支援センター、
大阪市此花区役所保健福祉課、藤井寺市健康福祉部健康課、岸和田市立保健センター、
東大阪市保健センター、松原市保健センター、河内長野市家庭児童相談室、河内長野市保健センター、
富田林市保健センター、和歌山県こども・女性・障害者相談センター、枚方市役所子ども青年課、枚方市子ども
未来部、交野市健やか部子育て支援課、明石こどもセンター、奈良県三宅町役場健康子ども課
浜松市発達医療総合福祉センター、奈良県明日香村教育員会、葛城市子ども・若者サポートセンター
京都府精神保健福祉総合センター、奈良県総務部、大阪府心理職、滋賀県障害福祉課
大阪狭山市保健センター、東大阪市心理職

(放課後デイサービス)

株式会社クリンミル、TREX、メルク株式会社

(4) その他

(NPO法人)

関西こども文化協会、ネットワーク医療と人権、子どもの心理療法支援会、COM総合福祉研究所
チャイルド・リソース・センター、育て上げネット

(個人開業心理臨床機関)

大阪メンタルサポートオフィス、株式会社Zen、嶋野心理相談室、のほらカウンセリングオフィス、くるみ心理相談
室

(公的機関)

法務省大阪少年鑑別所（心理技官）、大阪府警察本部（少年相談員）、独立行政法人 高齢・障害・求
職者雇用支援機構

7. 大学院の雰囲気について

(1) 少人数のアットホームな雰囲気

本学の大学院は、院生と教員の距離が近く、少人数でアットホームな雰囲気です。

本学では、院生一人ひとりの長所を伸ばすことを心がけており、1 学年定員が10名という少人数制で、
個々のニーズに応じたきめ細やかな指導を行っています。また、授業は一方的な講義ではなく、院生が実習先
で抱いた疑問など一人ひとりに必要な内容を取り上げられるよう、ディスカッションおよび実習形式が主です。さ
らに、非常勤講師の先生方も、臨床実践に強い優秀な臨床家です。

院生同士は仲が良く、助け合って学んでいます。教室には笑顔が多く、院生室も和気あいあいとした雰囲気

気です。また、在学生・修了生・教員が集まる親睦会があり、そこで縦と横のつながりをつくったり、情報交換をしたりしています。

(2) 院生の多様性

多様な院生が在籍しており、学び合いが豊かです。

現在まで、修了した院生の半数以上が他大学から入学した方です。学部で心理学以外を専攻した方も在籍しています。また、社会人経験のある方も少なくなく、学校教員や福祉施設職員といった近接領域で仕事をしていた人や全く分野の異なる職種で働いていた方なども多く、多様なバックグラウンドを持った院生同士の学び合いによって、相互に新鮮な刺激を受け合い、切磋琢磨の場になっています。

* 院生・修了生の声

『少人数だからこそ、自分の担当ケースはもちろん、同期や後輩、先輩方の担当ケースについても忌憚なく自由に議論したり、支えあうことができました。学内・学外実習で実際のケースや現場の空気に数多く触れることも大切ですが、最も大切なのは“わからなくても自分の頭で考え続ける”ことであり、そのような心理臨床の基本姿勢を育んでいける環境でもありました』(久永航平：修了生)

『理論から臨床家としての心構えまで、あらゆる大切なことを学ぶことができました。院生時代に学んだことは、現場に出てからも私を支えてくれています。ケース数、実習の豊富さ、そして授業や研究のどれをとっても、大経大を選んで良かったと思います。』(仙波あゆみ：修了生)

8. 臨床心理士・公認心理師の資格をもつ専任教員の紹介

本専攻の、臨床心理学を専門とする専任教員の紹介をします。わたしたちスタッフの理論的指向性は、精神分析、犯罪心理学、コミュニティ心理学、集団精神療法などと、多岐にわたっています。しかし基本として、探求型・洞察指向型セラピーというオリエンテーションをもっています。

う か い な つ こ
鵜飼 奈津子 (教授)

(1) 教員プロフィール

1992年～1997年 大阪府子ども家庭センター心理職を経て、Tavistock Clinic (UK) に留学、Child & Family Department で学ぶ。2004年7月 Tavistock Centre/ University of East London Psychoanalytic Psychotherapy with Children, Parents and Young People課程修了。

2000年～2004年 Parkside Clinic, CNWL Mental Health NHS TrustおよびTavistock Clinic, Tavistock & Portman NHS Foundation Trust 臨床訓練生、1997年～2008年 ロンドン医療センター臨床心理士、2004年～2008年 Refugee Therapy Centre Child & Adolescent Psychotherapistを経て、2008年 大阪経済大学人間科学部准教授に着任。神戸女学院大学大学院非常勤講師、吹田市教育センタースーパーヴァイザー、認定NPO法人子どもの心理療法支援会顧問、梅田東心理療法研究室等にて臨床活動を行っている。

Child & Adolescent Psychotherapist(専門職学位U.K.)、公認心理師、臨床心理士、日本精神分析学会認定心理療法士。

[主な著書]

- 『虐待を受けた子どものアセスメントとケア2』(共編著、誠信書房、2024)
- 『セミナー 子どもの精神分析的心理療法』(分担執筆、岩崎学術出版社、2024)
- 『虐待を受けた子どものアセスメントとケア』(共編著、誠信書房、2021)
- 『子どもと青年の精神分析的心理療法のアセスメント』(分担執筆、誠信書房、2021)
- 『子どもの精神分析的セラピストになること』(分担執筆、金剛出版、2021)
- 『児童養護施設の子どもの精神分析的心理療法』(分担執筆、誠信書房、2019)
- 『子どもの精神分析的心理療法の基本【改訂版】』(単著、誠信書房、2017)

[主な翻訳書]

- 『リ・スパーク ト라우マや抑うつを乗り越えて』(共監訳、誠信書房、2025)
- 『悲しみを言葉に 終末期の子どもと家族のこころのケア』(監訳、誠信書房、2024)
- 『トラウマを抱える子どものこころの発達を支えるもの』(共監訳、誠信書房、2022)
- 『胎児から子どもへ』(監訳、金剛出版、2021)
- 『子どもの精神分析的心理療法のアセスメントとコンサルテーション』(監訳、誠信書房、2021)
- 『親と離れて暮らす子どものための絵本シリーズ』(誠信書房、2019)
- 『子どものこころの発達を支えるもの』(監訳、誠信書房、2016)

[主な論文]

- 「子どもの精神分析的心理療法と子ども中心プレイセラピー 概説」(『精神分析的心理療法フォーラム』第10号、2022)
- 「臨床心理士指定大学院附属相談室における精神分析的設定でのケース実践について～大学院生による発表から見てきた精神分析的設定導入の意義と今後の展望」
(共著 『精神分析的心理療法フォーラム』第8号、2020)
- 「フロイトクライン論争を超えて」(『精神分析研究』第64巻第3号、2020)
- 「自閉スペクトラムと子どもの精神分析的心理療法」(『精神分析研究』第63巻第4号、2019)
- 「アタッチメントと神経科学」(『臨床心理学』第18巻第2号、金剛出版、2018)
- 「アタッチメントの問題と親子のレジリエンス」(『教育と医学』733号、慶應義塾大学出版会、2017)
- 「児童養護施設に暮らす子どもと心理療法、そして職員の支援」
(『子育て支援と心理臨床』Vol.10、福村出版、2015)

(2) テーマ

自閉症などの発達障害を持つ子どもおよび虐待を受けた子どもの精神分析的心理療法と、その家族や支援者のサポート

(3) 研究室紹介

私の専門は、英国対象関係論をベースとした子どもの精神分析的心理療法の実践とその研究です。特に、顧問を務める認定NPO法人子どもの心理療法支援会における活動を通じて、自閉症などの発達障害を持つ子どもや虐待を受けた子どもなど、日本では専門的な心理療法を受ける対象にはなりにくい子どもたちのこころのケアの実践、また、そういった子どもたちの日々の生活のケアにあたる家族や施設のスタッフが、子どもたちのこころや行動をより良く理解し、より良い援助ができるためのサポートに取り組んでいます。日本の児童養護施設には、多くの虐待を受けた子どもが生活しているにもかかわらず、そういった子どもたちのこころのケアにあたる心理専門職員の立場も役割も不明確なままに、

その専門性が十分に生かされていないという現状があります。このような状況の改善が、私にとってのライフワークであると考えています。当研究室の大学院生や修了生の多くは、こうした子どもたちのこころのケアに関心を持ち、専門的な子どもの精神分析的な心理療法の理論について学びながら、児童養護施設などの機関でその実践を行っています。

また、2011年度から、大阪経済大学心理臨床センターを拠点に、発達に何らかのつまずきを持つ子どもとその家族に対する「発達相談サービス」を立ち上げ、大学院生と子ども相談活動にあたっています。

(4) 研究指導

精神分析理論や子どものこころについて関心を持ち、大学院での研究および臨床トレーニングを望む学生は年々増加しています。しかし、一口に精神分析理論や子どものこころといっても、私たち専門家の領域はより深く分化していますしそれぞれの学生の興味・関心も幅広いものがあります。そこで研究指導1年次春学期には、精神分析理論の中でも特に英国対象関係論学派の理論に親しむため、さまざまな文献の講読を行います。自閉症などの発達障害や虐待を受けた子どものこころの理解に関しても、愛着理論、認知・発達心理学や脳神経科学など、近年精神分析が知見の交流を持つ他分野領域からの視点も豊富に取り入れた幅広い理解を通して、それぞれの興味・関心をどのように理論と実践に結びつけた研究成果として修士論文にまとめることができるのか、テーマの選定をします。並行してボランティア活動や非常勤心理職等を体験し、心理臨床の実践の世界に触れる機会を持つことが望まれます。1年次秋学期以降は、各自の研究テーマに基づいて具体的な研究計画を立て、研究をスタートします。毎週の研究指導の際にその進捗状況をチェックしながら、必要に応じて計画の変更・調整を行いつつ修士論文の完成を目指します。研究方法は、各自のテーマにより量的研究か質的研究かが異なりますが、これまでの修了生は訪問調査やインタビュー、心理療法やボランティア活動、また学外実習を通じての事例研究、心理検査を用いた量的・質的研究を行ってきました。

詳細は、鶴飼奈津子研究室HPをご覧ください。

<http://www.nabwork.com/>

こ が え り こ
古賀 恵里子 (教授)

(1) 教員プロフィール

1986年 信州大学人文学部 心理学専攻卒業後、1986年から2015年まで、医療法人明和会 琵琶湖病院で勤務しました（心理相談室・室長）。この間、1995年～2006年滋賀県私立病院協会堅田看護専門学校、2006年～2012年 京都女子大学現代社会学部、2012年～2013年京都教育大学発達障害学科、2011年～2015年日本精神科病院協会学術教育推進機構通信教育委員会で非常勤講師も務め、2015年4月より大阪経済大学人間科学部で仕事をしています。

公認心理師、臨床心理士、日本集団精神療学会認定 グループ・サイコセラピスト（スーパーヴァイザー）

[主な著書]

『集団精神療法テキストブック』（分担執筆、金剛出版、2025）

『公認心理師の基本を学ぶテキスト⑩ 健康・医療心理学』（共編著、ミネルヴァ書房、2022）

『Learning from Action: Working with the Non-Verbal』（分担執筆、Phoenix、2022）

『治療共同体実践ガイド』（分担執筆、金剛出版、2019）

『聴覚障害者の心理臨床・2』（分担執筆、日本評論社、2008）

[主な論文]

「英国の治療共同体におけるスタッフ・トレーニングとしてのリフレクティブ・グループ」『大阪経大論集』75巻6

号,2025

「Withコロナの社会で自助グループ、治療グループはどのように存続していくか（指定発言）」『社会精神医学』31巻、2022

「治療共同体・再訪」『集団精神療法』36巻2号、2020年

「コミュニティ・ミーティングが病棟雰囲気にもたらした変化と課題－参与観察者の視点から－」『大阪経大論集』70巻3号、2019

「精神疾患をもつ聴覚障害者の集団精神療法」『聴覚障害者のメンタルヘルスとケア』聴力障害者情報便化センター発行、2018

「精神科病院を覆う集合的防衛に関する考察—Robert Hinshelwoodの組織的現象に関する理論から—」『大阪経大論集』68巻8号、2018)

「治療環境においてアクションから学ぶために—Learning from Action Working Conference の体験を通じた考察—」（共著・筆頭執筆者）『集団精神療法』33巻1号、2017

「長期入院患者のグループにおけるリーダー交代」（原著）『集団精神療法』21巻1号、2005

(2) テーマ

集団精神療法の理論と実践、成長や回復を可能にする環境としての治療共同体

(3) 研究室紹介

私は、29年間にわたり精神科医療の現場で仕事を続け、その間、様々な心理社会的困難を抱える患者さんたちと出会いました。臨床心理士として心理査定、個人心理療法、集団精神療法等に従事しましたが、医師、看護師、精神保健福祉士等の多職種でチームを組んで治療に取り組む姿勢を大切に考えてきたつもりです。

私が特に興味をもって勉強してきたのは集団精神療法です。1997年に日本集団精神療学会に入会し、その後、学会認定のグループ・サイコセラピスト、更にスーパーヴァイザーとして認定されました。病院で実践していた集団精神療法では、患者さん同士の相互作用が生み出す治療的な力を目の当たりにすることができました。また、自分がメンバーとして集団精神療法のトレーニンググループに参加し続けることを通して、自分自身を探索する作業を継続してきました。この作業は今後も必要だと考えています。

また、前職場では、日本初の聴覚障害者精神科専門外来に開設当初からスタッフとして関わり、聴覚障害をもつ患者さんそれぞれのコミュニケーション手段に合わせて心理療法や心理査定を実践した経験を有しています。手話で自由に話をする集団精神療法も行っていました。

一方で、さまざまな治療的アプローチが有効に機能するためには、それぞれの治療法を包み込む「環境」が大切であることを、精神科病院で長く臨床を続ける中で実感しました。ここで言う環境とは、人と人との関係が織りなす環境のことです。人と人がしっかりと情緒的に関わり続けることを可能にする環境です。人と人の関わりの中では、時に痛みを伴うような局面が生じますが、そこにきちんと向き合って「自分に何が起きているのか」「自分と他者との間に何が起きているのか」を考え続けることが大切だと考えています。

心理的問題に対処する組織、特に、入院や入所などの居住を共にする環境では、クライアントの抱える問題と、スタッフ自身が抱く感情（時に、気付かれない）が交錯して様々な力動が生じます。だからこそ、クライアントとスタッフが共に考え続けるためのセッティングが必要です。集団精神療法や治療共同体が、そのための方法となり得ると考え勉強を続けています。2022年4月から2023年3月までの1年間は、イギリスで治療共同体について学ぶ機会を持つこともできました。

(4) 研究指導

集団精神療法は様々な臨床現場で広く実践されているアプローチです。集団精神療法では、対人関係に困難を感じているクライアントが、安全なバウンダリーの中で、他のメンバーやセラピストと相互交流しながら自分自身について探索することができます。また、臨床現場も一つの集団です。臨床現場が、個々の治療が有効に作用し、クライアントの成長や回復を可能とする環境となるには何が必要なのかについて、一人一人しっかり考えていただきたいと思います。

1年次春学期には、集団精神療法や治療共同体に関する文献を読んで理解を広め深めます。その中で、自分が興味をもつ対象や領域を同定し、1年次秋学期には、そのテーマを更に明確にして研究計画を更に練って、2年次に向けて研究活動、論文執筆を進めます。自分の問題意識を、あきらめずに追究して下さい。

研究を進めることと並行して、自分自身への気づきを高めるために、「体験グループ」に参加することを奨励します。

さかの よしたか
坂野 剛崇（教授）

(1) 教員プロフィール

1987年、山形大学教育学部卒業。同年4月、家庭裁判所調査官補となり、2年間の研修を経て、1989年3月、家庭裁判所調査官に任官。以後、札幌、秋田、東京、名古屋、大阪で、非行少年の事件のアセスメントと指導、離婚をはじめとする家庭内の紛争の調整などに従事。2007年、日本福祉大学大学院社会福祉学研究科修了。2014年、関西国際大学人間科学部教授。2020年4月、本学人間科学部着任。

公認心理師、臨床心理士。NPO法人「スキマサポートセンター」理事、カウンセリングルーム「大阪中津臨床心理カウンセリング」カウンセラー、一般社団法人「司法心理研究所」嘱託研究員、日本司法福祉学会理事、日本犯罪心理学会編集委員

[主な著書]

『公認心理師の基礎と実践 第19巻 司法・犯罪心理学 第2版』（分担執筆、遠見書房、2023）

『心の専門家養成講座⑩ 司法心理臨床実践』（分担執筆、ナカニシヤ出版、2023）

『「公認心理師の基本を学ぶテキスト14 心理的アセスメント」』（分担執筆、ミネルヴァ書房、2023）

『司法福祉・実践と展望』（分担執筆、ぎょうせい、2021）

『少年事件加害者家族支援の理論と実践 家族の回復と少年の更生に向けて』

（分担執筆、現代人文社、2020）

『犯罪心理学辞典』（分担執筆、丸善、2016）

『社会福祉・介護福祉のための質的研究法 実践者のための現場研究』（分担執筆、中央出版、2013）

『加害者臨床』（分担執筆、日本評論社、2012）

[主な論文]

「非行への関与と離脱を巡る自己変容プロセス—非行経験男性のライフストーリーへの発生の三層モデル（TLMG）によるアプローチ—」『司法福祉学研究』第24号、2024（単著）

「ハラスメントとソーシャルワーク」をテーマとした模擬授業の試み——受講者のアンケートデータの分析から——」社会福祉学研究第64巻第1号、2024（共著）

「非行への関与と離脱を巡る経験に関する一考察—非行経験のある女性の語りの現象学的アプローチによる記述—」『大阪経大論集』第74巻6号、2024（単著）

「公認心理師・臨床心理士養成におけるスーパーヴィジョンの目的と実践の現状」『大阪経済大学心理臨床センター紀要』第16号、2022（単著）

「ソーシャルワーカー養成におけるハラスメント教育の現状と課題」『司法福祉学研究』第21号、2021（共著、筆

頭執筆者)

「大学生が「司法・犯罪心理学」を学ぶということ」『大阪経済大学心理臨床センター紀要』第15号、202

「保護者は、子どもの非行をめぐって何を体験するか：保護者の実情にみる働きかけへの示唆」『家庭の法と裁判』26号、2020

「犯罪加害者家族に対するサポート・グループ活動の意義と課題——参加者へのインタビュー調査の質的分析から」『司法福祉学研究』第19号、2019（共著、筆頭執筆者）

「心理支援専門職教育におけるスーパーヴィジョンの意義と課題－大学院生3名の語りに対する質的記述的研究法による分析から－」『関西国際大学心理臨床紀要』第2号、2019

「非行・逸脱行動のある生徒に対する中学校教諭の理解と指導－中学校教諭に対するインタビュー調査から－」『関西国際大学心理臨床研究所紀要』第2号、2017（共著）

「初回面接における新人セラピストの役割遂行に関する一考察－3名の語りに対する質的記述的研究による分析から－」『関西国際大学心理臨床センター紀要』第9号、2016

(2) テーマ

犯罪・非行などの加害者の更生や被害者の支援、また、それらの人たちの家族などへの支援、刑事事件心理鑑定、対人援助職への支援、質的研究法

(3) 研究室紹介

病気や心理的な問題などのために家庭、職場、学校、地域で生きにくさを感じ、適応的な社会生活を送れない人たちに、どう支援していけばいいのかを考えて続けていければと思っています。

長年関わってきた、非行少年や犯罪加害者、その家族の方は、社会的には責任を負う人ではありますが、一人ひとりは、どこか生きづらさを抱えてきていることが少なくなく、そのための不適応（行動）が非行であったり犯罪であったりしています。これらの人に責任を求め、罰するだけでは、犯罪・非行のない生活を送れるようにはならないでしょう。その人たちが、犯罪は非行がなく、社会的に容認される方法で社会生活を営んでいけるようにするには、どういった支援が必要なのかを考えていく必要があります。

こうした生きにくさを抱えた人は、犯罪や非行に限らないでしょう。DVや虐待、ハラスメントなどの被害に苦しむ人ももちろんですが、それらをしてしまう人にも背景があります。また、家族をはじめそうした人の周囲の人たちにも支援が必要な場合もあります。こうした人たちに、心理の専門性を活かして何ができるのか何をすべきなのか。それらを考えていければと思っています。また、それらの人たちを支援する専門職が的確な役割と機能を果たしていけるようになるには、それらの人たちをどう支援していけばいいのか。それらについても考えていければと思っています。

これまで、クライアントになっている人たち、それを支援している対人援助の専門職にある人たちに、インタビュー調査で生の声を拾いながら、これらの人の抱える課題や思いについて考えてきました。心理的支援について、当事者の声を大切にしながら、当事者に寄り添う研究を通して一緒に考えていければと思っています。

(4) 研究指導

研究テーマは、一人ひとりの問題意識を可能な限り尊重します。実習や実践の中でいろんなことを考えたり、疑問を持ったりすることでしょう。研究は、それらを深め整理し、次の実践に繋がる新しい視点をもたらしてくれると思っています。そして、その後の実践は、新たな問題意識へとつながっていき……。すなわち、実践と研究は往還的なもので、それが専門性を向上させてくれるものと思っています。

一人ひとりが、日常生活や仕事・実習等における実践の中で抱いた問題意識について、それに取り組んでいる本人としての“解”を見出すという研究の基本に沿って、テーマ設定、調査方法、分析方法等について一緒に検討してい

ます。そして、その成果が、その後の実践をより豊かなものにしていく意義のあるものにしていければと思っています。

いわた みつひろ
岩田 光宏 （准教授）

(1) 教員プロフィール

2001 年、早稲田大学教育学部教育心理学専修卒業。2003 年、大阪市立大学大学院生活科学研究科前期博士課程修了。2022 年、同後期博士課程修了。博士（学術）。公認心理師、臨床心理士。

財団法人浅香山病院 精神障害者社会復帰施設アンダンテ（非常勤スタッフ）などを経て、2005 年に堺市役所に入職（常勤心理職）。2006 年～2018 年、堺市こころの健康センター。2018 年～2020 年、堺市障害者更生相談所。主に「ひきこもり」「発達障害」など精神保健福祉領域の臨床実践に携わる。大阪人間科学大学心理学部講師を経て、2023 年から大阪経済大学人間科学部講師。現在、同准教授。

阪南市市民福祉課 ひきこもり・地域の居場所づくり支援 草の根ネットワーク アドバイザー、堺市障害者就業・生活支援センター 障害者就業支援アドバイザー、堺市障害支援区分認定審査会委員、公認心理師養成大学教員連絡協議会 現場実習検討委員会委員、任意団体「こころの健康えとせとら」

（<https://sites.google.com/view/kokoroetc2020/>）にて、ひきこもりのコミュニティ支援の実践が続いている。

[主な著書]

宮脇稔ほか（編）「健康・医療心理学」第 2 版 2025 年 医学書院 （共著）

[主な論文]

- ・岩田光宏 2025 地域づくりの土台として機能するひきこもり支援の市町村プラットフォーム：阪南市「草の根ネット」による居場所づくりの展開から学ぶ。大阪経大論集 75(6) 40-60.
- ・岩田光宏, 米澤宙, 赤穂亮介 2025 アドボカシーとピアサポートの臨床心理学：これからの心理職は自らの当事者性をどう捉えるか。臨床心理学研究 62(2) 40-48.
- ・岩田 光宏 2023 心理職の国家資格化を巡る経緯から見る公認心理師制度の社会的意義「臨床心理学的社会制度論」の必要性。大阪人間科学大学紀要 22 84-96.
- ・岩田 光宏, 荒屋 昌弘, 坂下 英淑ほか 2023 公認心理師養成課程における大学院生による学部生に対するピアサポート活動の実践。大阪人間科学大学紀要 22 97-104.
- ・岩田光宏 2021 就労後のひきこもり経験者を対象とした自助グループの体験プロセス。心理臨床学研究 39(4) 318-328.
- ・岩田 光宏 2017 ひきこもり当事者によるピア活動を目的としたひきこもりサポーター養成派遣事業「堺市ユース・ピアサポーター」養成派遣事業の取り組みについて。日本公衆衛生雑誌 64(12) 727-733.
- ・岩田 光宏, 真志田 直希, 金谷 尚佳ほか 2017 ひきこもりの社会参加に繋げる集団支援の方法 サカイ式すべらないグループワークの実践と転帰分析。精神科治療学 32(4) 541-547.
- ・岩田 光宏, 真志田 直希, 金谷 尚佳ほか 2016 ひきこもりの個別相談段階から集団支援段階へ繋げる方法 グループワークの企画方法と効果。臨床精神医学 45(9) 1197-1205.

(2) 研究テーマ

ひきこもり支援の実践に関する研究。精神保健福祉分野における臨床心理専門職の実践に関する研究。臨床心理専門職に関わる制度に関する研究。

(3) 研究室紹介

私の主な臨床経験は、自治体の心理職として「ひきこもり」に関する相談支援に携わったことです。「ひきこもり」とひとこと言ってもひとり一人の事情は異なるため、心理支援を提供する際には個別性を重視した丁寧な関わりが必要です。また、現在「ひきこもり」は「孤独・孤立」の問題に位置付けられ、我が国における社会問題のひとつでもあるため、背景の社会的要因の理解とそれへのアプローチも求められます。そのため、社会から排除されひきこもり状態に追い込まれないコミュニティについて考え、その実現に向けて実践および研究を重ねていくことが大切であると考えています。

大学院では「臨床心理査定演習」「臨床心理実習」を担当しています。実習や演習での学びを充実させるには、院生同士はもちろん学部生や教職員、実習先で出会う方々等と、相互的に支え・学び合う関係性を築くことが重要です。そうした関係性を体験することは、現在ケアの場で重視されている多職種協働やピアサポートの理解に繋がるだけでなく、今後の実践者としてのキャリアを助けるものになると思います。

(4) 研究指導

研究指導では、それぞれの関心のあるテーマを大切にしながら、できるだけ多角的な視野で研究を進められるよう指導します。

具体的には、研究テーマに関する文献に限らず、「孤独・孤立」に関わる生きづらさを知るための文献など周辺領域にも学びを広げます。また、現場の実践者の話や、生きづらさを抱える人や、支援の利用者の体験談から学ぶことも重視します。各自の研究テーマにもよりますが、フィールドワークとしてひきこもりに関する地域の居場所活動に参加したり、ひきこもり支援者の研究会等で実践的に学びつつ、研究を進めていくことを推奨します。

研究に取り組む機会を使って幅広い見方を醸成することは、現場で臨床活動を行う際に役立つと考えています。

おかむら かおり
岡村 香織（准教授）

(1) 教員プロフィール

1999 年 関西大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士課程前期課程修了。2011 年 関西大学大学院心理学研究科心理学専攻博士課程後期課程単位取得退学。1999 年～2021 年 医療法人恒昭会藍野病院、藍野花園病院において臨床活動に従事。2014 年～2018 年 京都精神分析心理療法研究所・精神分析的な心理療法家養成プログラムを修了。この他、関西大学社会学部や大阪府柔道整復師会専門学校の非常勤講師、関西大学心理相談室の非常勤相談員などを経て、2022 年 4 月より大阪経済大学人間科学部に着任。

臨床心理士、公認心理師、京都精神分析心理療法研究所精神分析的な心理療法家。武庫川女子大学大学院非常勤講師、帝塚山学院大学大学院スーパーヴァイザー、追手門学院大学大学院スーパーヴァイザー、大阪府臨床心理士会研修委員、大阪府臨床心理士会医療保健部会委員、KIPP 天満橋心理オフィスカウンセラー、関西大学心理臨床研究会監査、京都精神分析心理療法研究所理事、日本精神分析的な心理療法フォーラム理事

[主な著書]

『高齢者こころのケアの実践 上巻 認知症ケアのための心理アセスメント』（分担執筆、創元社、2012）

『高齢者こころのケアの実践 下巻 認知症ケアのためのリハビリテーション』（分担執筆、創元社、2012）

[主な論文]

- 「依存をめぐる葛藤とその変容に関する検討－愛着に困難を抱える事例から－」『大阪経済大学心理臨床センター紀要』第 18 号、2024
- 「統合失調症患者の入院期間と認知機能に関する検討」『大阪経済大学心理臨床センター紀要』第 17 号、2023
- 「状況的現実のもとで生じる神秘化と脱神秘化について」『Psychoanalytic Frontier』第 10 巻、2023
- 「医療機関における地域貢献活動と公認心理師の役割」『大阪経大論集』第 73 巻、6 号、2023
- 「セラピストが抱く『つながりにくさ』と愛着に関する検討」『Psychoanalytic Frontier』第 7 巻、2021
- 「統合失調症者における日本語版 MoCA の重症度判別基準に関する検討」『藍野大学紀要』第 31 巻、2019
- 「慢性統合失調症者への認知機能改善療法実施の試み」『藍野学院紀要』第 27 巻、2015
- 「Cloninger の 3 次元人格理論による認知症患者の人格特徴について－軽度認知障害者とアルツハイマー病者に対する Tridimensional Personality Questionnaire (TPQ) の適用－」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第 20 号、2012
- 「2 型糖尿病患者における心理的負担感と気分状態および性格傾向との関連性に関する基礎研究」『心身医学』第 51 巻第 8 号、2011
- 「WISC-Ⅲを用いた軽度発達障害児の神経心理学的アセスメント」『臨床精神医学』第 39 巻、2010

(2) 研究テーマ

メンタルヘルスと心理社会的支援について対人関係精神分析の視点から研究する。

(3) 研究室紹介

これまで私は医療領域を中心に心理臨床の実践を積んできました。臨床現場で出会う患者さんはみな、生きる上での困難や苦痛を抱えておられました。「誰一人同じ人間はいない」、これは自明のことですが、苦しみのなかにおいてこれほど孤独なことはないと思います。一人ひとりの個別の体験に寄り添いながら、患者さんが再び歩き出すまでの杖として機能するにはどうすればいいかをいつも考えています。

世に生を受けてから死に至るまでの期間に、個人が遭遇する健康を脅かす要因、いわゆる健康リスクはさまざまです。とりわけ現代社会においては、人間関係のありようが変化し、心の問題が多様化しています。生きる困難を抱えた人のそれまでの歴史を全人的にストーリーとして理解すること、そして生きづらさの要因を個人のなかだけに見つけるのではなく、社会とのつながりにおいて生起した問題ととらえること、これをテーマに日々研究を行っています。

大学院では、「臨床心理学特論」や「臨床心理基礎実習」を担当しています。臨床実践を支える理論や多様な視点にふれつつ、ロールプレイなどの体験的な学びを通して、対人援助における基本的な姿勢と倫理観を身につけていきます。ただ知識を学ぶだけでなく、「なぜそうするのか」「自分ならどう関わるか」といった問いを大切にしています。理論と実践の間を往還しながら、学生一人ひとりが自分の言葉で臨床を考えていけるような場づくりを心がけています。

かみがき かずき
神垣 一規（准教授）

(1) 教員プロフィール

2008年に新潟大学教育学研究科臨床心理学分野修士課程修了。同年4月に心理技官として法務省に入省。

2020年3月まで八王子少年鑑別所、前橋少年鑑別所、新潟刑務所、広島拘置所、広島少年院と勤務していき、非行少年や犯罪者の心理鑑別や改善指導、社会復帰支援に携わる。関西国際大学心理学部准教授

を経て2024年4月に大阪経済大学人間科学部准教授として着任。

臨床心理士・公認心理師。現在は神戸刑務所処遇カウンセラー，兵庫県臨床心理士会理事（司法・法務・警察領域委員会委員長），兵庫少年友の会賛助会員，法務省矯正研修所広島支所及び高松支所における改善指導のスーパーヴァイザーを兼任。

[主な著書]

『入門 司法・犯罪心理学』（共著，有斐閣，2022）

『URP先端的都市研究シリーズ18 刑務所出所者等の意思決定・意思表示の難しさと当事者の声にもとづく支援』（共著，大阪市立大学都市研究プラザ，2020）

[主な論文]

「刑務所の文化や風土が受刑者処遇に与える影響－拘禁刑の導入を踏まえて－」『大阪経大論集』75(6), 2025（単著）

「理想の居場所と受刑前居場所感の一致度が男子受刑者の再犯に与える影響について」『犯罪心理学研究』62(1), 2024（共著・筆頭執筆者）

「支援を希望しない受刑者に対する理解と対応－刑務所に勤務する福祉職への調査を通して－」『関西国際大学研究紀要』25, 2024（共著・筆頭執筆者）

「受刑者の自己決定と援助要請に関する一考察」『関西国際大学研究紀要』24, 2023（単著）

「少年院在院者を対象とした認知機能査定ツールの開発」『矯正教育研究』67, 2022（共著・筆頭執筆者）

「少年院における経験の意味付けと非行からの立ち直りとの関係：ある男子少年院における出院時アンケートの分析を通して」『特殊教育学研究』59(2), 2021（単著）

「社会内での居場所感が再犯に与える影響について」『司法福祉学研究』21, 2021（共著・筆頭執筆者）

「男子受刑者用居場所尺度の開発と受刑者が居場所に求める心理的機能の分析」『犯罪心理学研究』58(1), 2020（共著・筆頭執筆者）

「大麻取締法違反受刑者に対する薬物依存離脱指導におけるグループ体験の変遷と効果」『日本アルコール関連問題学会雑誌』20(2), 2019（共著・筆頭執筆者）

「矯正施設における就労支援の課題と展望」『刑政』129(8), 2018（単著）

「受刑者が社会内で孤立する要因に関する一考察」『司法福祉学研究』18, 2018（単著）

「男子受刑者が有するキャリア発達上の課題－就労安定性とその背景要因との関係に注目して－」『キャリア教育研究』35(2), 2017（共著・筆頭執筆者）

「受刑者に対する改善指導におけるグループ体験の変遷と改善効果」『性とこころ』8(2), 2017（共著・筆頭執筆者）

「刑務所在所中の薬物依存者の実態と社会復帰支援のための課題」『日本アルコール関連問題学会雑誌』18(1), 2016（共著・筆頭執筆者）

「非行少年のバウムテストに関する一考察：PDIの検討から」『性とこころ』6(2), 2014（共著・筆頭執筆者）

「福祉支援を希望しない高齢受刑者の特徴」『司法福祉学研究』14, 2014（共著・筆頭執筆者）

(2) 研究テーマ

犯罪者や非行少年の理解と再犯・再非行防止のための治療的・教育的介入に関する研究

(3) 研究室紹介

これまでの司法・犯罪領域での臨床経験から、なぜ非行や犯罪をしてしまうのかということを心理的に探究することで、犯罪に至っていない人にも共通するような、心理社会的な課題やそれに対する個人の反応としての行動や感情の出方などを理解することができていると思っています。さらに、それらを解明することは、非行少年や犯罪者が再び犯罪行為に及ばないためにはどうすればよいのかということを考える基盤になります。そして、そうした根拠に基づいた介入を実践し、その効果を検証することで、犯罪者らが抱える新しい課題が見えてきて、より深く彼らのことを理解する必要が生じてきます。現在は、こうしたサイクルに資するような研究や実践活動を行っています。

大学院では、「臨床心理基礎実習」「司法・犯罪心理学の理論と支援」「投影法特論」を担当しています。「臨床心理基礎実習」では、実習での体験をディスカッション形式で共有する機会を設け、実習で感じた素直な感覚を言葉で表現し合い、実習での体験をより意味のあるものへとしていけるように支援していきます。「司法・犯罪心理学の理論と支援」では、司法領域で働く心理職の専門性について理解できるように、事例検討やグループワークなどを積極的に用いていきたいと思っています。「投影法特論」ではロールシャッハ・テストの実施、採点、解釈の実践と、こうした投影法の役割や必要性についての学習を進めています。

つばた ゆうき
坪田 祐季（准教授）

(1) 教員プロフィール

2006年、愛知学院大学大学院文学研究科心理学専攻修了。2023年、立命館大学人間科学研究科博士課程後期を修了し、博士（人間科学）の学位を取得。

2006年以降、スクールカウンセラーや療育機関でのセラピストなど、主に教育・福祉領域の現場で臨床活動を行う。その他、愛知淑徳大学、鈴鹿医療科学大学、日本福祉大学の非常勤講師を務める。2017年～2019年 鈴鹿医療科学大学付属こころの相談センター・こころのクリニックでの勤務を経て、2019年4月より大阪経済大学人間科学部に着任。

臨床心理士・公認心理師。現在、一般社団法人三重県公認心理師会 副会長、弥富市教育委員会スーパーバイザー、なごや子ども応援委員会アドバイザー、三重県いじめ対策アドバイザー、名古屋市立大学非常勤講師、四日市市学校臨床心理士会 副代表、統合的アプローチ研究会 副代表を務める。学校臨床を専門とし、コミュニティに根差した実践や研究を行っている。

[主な著書]

『学校コミュニティにおけるスクールカウンセラーの心理・社会的支援』（単著、ナカニシヤ出版、2025）

『公認心理師 基礎用語集』（共著、遠見書房、2018）

[主な論文]

「学校現場におけるスクールカウンセラーの統合的アプローチの実践－ホロニカル・アプローチの立場からの一考察－」
『大阪経大論集』第7巻6号、2025

「学校緊急支援の心理支援体制構築において心理職に求められる課題―事例の実践報告を基に―」『支援対話研究』第8号、2023（共著・筆頭執筆者）

「学校コミュニティにおいてスクールカウンセラー等心理職がネットワークに参画することの意義と可能性」『臨床心理学』第23巻1号、2023（共著・筆頭執筆者）

「多層多次元的な心理・社会的支援におけるスクールカウンセラーの役割と展望」『統合的アプローチ研究』第4号、2023（単著）

「心理実習における学生の学びと授業のあり方― 振り返りアンケートをもとにした一考察 ―」『大阪経済大学心

理臨床センター紀要』第16号、2022（単著）

「学校コミュニティにおける心理的支援ネットワークの創出過程に関する検討」『支援対話研究』第7号、2022（単著）

「チーム学校における心理援助とスクールカウンセラーの役割」『大阪経大論集』第72巻5号、2022（単著）

「スクールカウンセリングにおける心理援助の現状と課題－スクールカウンセラーの歴史と実践に着目して－」『大阪経大論集』第72巻1号、2021（単著）

「対人援助職の対話の場を考える－「対人援助職のための『統合的アプローチ研究会』(AIA)」の試みを通して－」『統合的アプローチ研究』第2号、2021（共著・筆頭執筆者）

「対人援助の場を考える」『統合的アプローチ研究』創刊号、2020（単著）

「教育現場における他機関連携に関する一考察－学校でのより効果的な支援のために－」『鈴鹿こころ臨床心理学研究』第1号、2019（単著）

「学校コミュニティ支援における心理職の役割に関する考察－中学校区を対象とした心理教育実践の検討から－」『社会福祉科学研究』第7号、2018（単著）

「対話を促進する授業のあり方に関する考察－振り返りシートの質的分析より－」『支援対話研究』第5号、2018（単著）

「スクールカウンセラーによる学級を対象としたグループアプローチの試み」『愛知学院大学心理臨床研究』第12号、2011（単著）

(2) 研究テーマ

教育現場における心理・社会的支援、スクールカウンセラーの役割と支援システムの構築に関する研究

(3) 研究室紹介

私は、スクールカウンセラーとして学校臨床を中心に実践を積んできました。教育現場では、子どもに関する問題が複雑化・多様化しています。子どものこころの成長を支えていくためには、子どもやその家族の支援とともに、その人を取り巻く環境（友人・教師・クラス・学校組織・地域など）との関係について理解する視点も大切です。そのためには、個と環境を様々な角度からアセスメントし、支援をしていくことが求められます。そのため、個人の内的世界へのアプローチとともに、人が生活する「場」や「コミュニティ」を含んだ全体性の視点をもちながら、多層・多次元的な援助を大切にしていきたいと考えています。そのため、学校コミュニティにおける連携を基盤とした支援に関する実証的な研究と実践を積み重ね、学校コミュニティにおける子どもの心理支援の発展に繋がっていきたく日々考えています。

大学院では、「学校臨床心理学特論（教育分野に関する理論と支援の展開）」「臨床心理実習Ⅱ」を担当します。授業では、心理臨床家としての基礎を身につけていくために、理論や技法に関する学習に加え、ロールプレイなど体験的に学ぶ機会を設けます。そのような機会を通して、より良い支援の在り方や心理職に求められる姿勢・倫理観について考えていきましょう。学んでいく中で、ときに自分自身の課題と向き合うこともあります。それは、将来、臨床家として成長していくための大きなチャンスでもあります。しっかりと向き合い、考える姿勢で臨んでください。授業では、ディスカッションなどを通じて共に考え・学びを深めていくプロセスを大切にしていきたいと思います。

(4) 研究指導

当研究室では、学校臨床心理学やコミュニティ心理学をベースに、教育領域における心理・社会的支援に関する研究指導を行います。スクールカウンセラーなど教育の現場に携わる心理職は、子どもやその家族の支援とともに、個と集団・環境との相互作用について理解し、ときには集団や環境にアプローチしていくことも必要です。そのため、子どもやその保護者といった個人だけではなく、心理教育・学校組織へのコンサルテーション・多職種連携・地域支援等の多様な観点から実践と研究を行うことが可能です。研究を通して自身の問いを明らかにし、研究成果を臨床実践に繋げて

いただきたいと思います。

研究テーマや研究手法については、院生自身の問いを尊重し、問題や目的に即した研究方法を共に検討します。1年次春学期は、問題意識や問いを明確にするために関連論文を精読します。その上で、1年次秋学期で研究手法を設定し、2年次春学期に調査・分析を行い、修士論文としてまとめていきます。

ど い ゆ き
土井 裕貴（講師）

(1) 教員プロフィール

2013 年、大阪大学大学院人間科学研究科教育学系臨床心理学分野博士前期課程修了、2016 年、同博士後期課程満期退学。2014 年より、スクールカウンセラー、保健センター・子育て支援センター発達相談員、児童相談所での心理判定員、精神科・心療内科クリニック、児童発達支援・放課後等児童デイサービス心理士、EAP 機関での研修講師・相談員などに従事。主に乳幼児～青年期の子どもとその保護者を対象に、現場のニーズに合わせることを重視しながらカウンセリングを行う。その他、兵庫大学短期大学部や姫路獨協大学での非常勤講師、日本福祉大学教育・心理学部での助教・講師を経て、2025 年より大阪経大学人間科学部講師。臨床心理士、公認心理師。心理リハビリテーショントレーナー資格。現在は、大阪公立大学非常勤講師、日本福祉大学非常勤講師、合同会社オフィスヒューマンサポートにて自治体の職員支援に関わっている。

[主な著書]

『Introduction to Dohsa-hou – An Integrated Japanese Body-Mind Therapy』（共著、Osaka University、2016 年）

『「0 から 100 歳の地域包括ケア」への挑戦 大学と地域の共同研究』（共著、大学図書出版、2024 年）

[主な論文]

「スクールカウンセラーによる小学校担任教員への支援効果—WISC-IVの協働的フィードバックを活用して—」『教育心理学研究』第 72 巻 1 号、2024 年（共著、筆頭筆者）

「不登校の子を“抱えていく”母親との面接過程」『日本福祉大学心理臨床研究センター紀要』第 17 号、2022 年（単著）

「小学校のスクールカウンセラー活動における心理教育的支援に関する研究動向—多職種連携・協働における課題—」『日本福祉大学福祉社会開発研究所 現代と文化』144 号、2022 年（単著）

「本邦における心理検査のフィードバックに関する展望と課題」『日本福祉大学 子ども発達学論集』第 14 号、2022 年（単著）

「キャリアの浅い対人援助職者における主観的な疲労体験 —バーンアウトの理解と支援に向けて—」『カウンセリング研究』第 54 号 2 巻、2021 年（単著）

「キャリアの浅い対人援助職者の疲労に伴う主観的な感情体験についての日誌調査」『感情心理学研究』第 25 号 2 巻、2018 年（単著）

「万能的なふるまいをする女子中学生とのスクールカウンセリング—Th.はスクールカウンセラーとして何ができたのか—」『大阪大学大学院人間科学研究科心理教育相談室紀要』第 22 号、2016 年（単著）

「タ立のように来談する小 1 男児とのプレイセラピー」『大阪大学大学院人間科学研究科心理教育相談室紀要』第 20 号、2014 年（単著）

「対人援助職におけるバーンアウト・感情労働の関係性―精神的な疲労に着目する意義について―」『大阪大学教育学年報』第 19 号、2014 年（単著）

(2) 研究テーマ

対人援助職への支援者支援、心理検査の結果の効果的なフィードバック、子ども・学校臨床

(3) 研究室紹介

私は主に子どもとその保護者・産業領域を対象に臨床活動を行ってきました。様々な機関で経験を積ませていただくなかで、発達の凸凹や偏りといった、いわゆる発達障がいの方とも多く関わってきました。

心理職としてどの現場でも共通して感じたのは、相談者だけではなく現場のスタッフにも自己理解や自分のケアという視点が必要だということです。「支援者」という枠に入ってしまうと、つい目の前の相談者に対して、自分が何かしなければいけないと考えてしまい、自分のケアをおろそかにしてしまうことがあると思います。最近では、学校現場が抱える問題が複雑になり教師の負担が高くなっているため、何か先生方の助けになることを行っていけたらと考えています。また、臨床経験の中で、心理検査の結果のフィードバックがうまく進められた時はその後のセラピーが円滑に進んだことや、フィードバックをきっかけに保護者・教師の子どもの理解が深まり、子どもへの適切な支援につながったことなどから、心理検査のフィードバックに興味をもって最近は研究に取り組んでいます。

大学院では「臨床心理実習 I a・I b」を担当しています。実習先では様々な当事者さん・職員さんと出会うことと思います。実際に現場に入ることによってその空気感に触れ、出会った目の前の当事者さんの抱える思いや背景、困難に思いを馳せる機会が多くあります。また、心理職はどの職場に入るかによって役割が異なります。現場で心理職がどういった働きを求められているか体験を通して考える機会もあります。それらの体験を皆さんの中でどのように整理し、位置付けていくか、一緒に考えを深めていく手伝いができればと思っています。

9. 心理臨床センター

心理臨床センターは大学院生の臨床心理学的実践実習と研究のための施設です。そして、地域の方々のための臨床心理学的支援をするための施設です。

臨床心理士／公認心理師を目指す院生にとって、心理相談や遊戯療法、そして心理検査を通して、クライアントに出会い、理解し、役に立ちたいと言う気持ちは大変強いと思います。その最初の一步を当センターで踏み出すのです。将来の臨床心理士／公認心理師を目指す院生のため、常勤・非常勤臨床心理士が必ずどの曜日にもセンターにいて、院生たちの相談に耳を傾けています。また、修了生は、研修員として当センターで心理療法などを担当しています。中には、臨床心理士になって当センターの非常勤臨床心理士として勤務している先輩もいます。院生にとってこのような先輩の存在は、とても心強いと思います。

心理相談・心理検査などの申し込みは、電話、電子メール、ファックスによって当センターに届きます。クライアントとの話し合いで、インテーク面接の日時を決め、その日時によって、インテークの担当者が決まります。インテークは当センターの常勤・非常勤臨床心理士が行い、院生（1、2名）がそれに陪席します。

陪席した院生は、インテーク記録を作成し、ケースカンファレンス（臨床心理実習Ⅱ）に提出します。ケースカンファレンスでは、臨床心理学専攻の教員と、院生と研修員、そしてセンター常勤の臨床心理士が出席し、陪席者の報告の後、継続面接の担当者について検討します。原則、院生が担当することになります（ケースの内容によっては、研修員や当センターの常勤・非常勤臨床心理士が担当することがあります）。2024年度、院生11名が71名のク

クライアントを担当しました。

ケースカンファレンスは、講義期間中は、毎週1回3時間行われます。また、夏休み・春休み期間中各1～2回行われます。ケースカンファレンスでは、インテークケースの継続担当者の決定とともに、当センターで実施された院生の担当ケースの事例検討も行われます。

心理臨床センタースタッフ

中澤 鮎美（常勤職員 臨床心理士 公認心理師）

大阪経済大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻を修了し、2014年に臨床心理士資格を取得しました。その後、児童養護施設で子どもを対象にしたセラピーや、地域の保健センター・発達支援センターでの発達検査、大学での非常勤講師、また、高校のスクールカウンセラーや電話教育相談の相談員、働く人のメンタルサポートなど、教育、福祉、産業とさまざまな領域で仕事をしてきました。そして、2018年4月から大阪経済大学心理臨床センターに勤務しています。院生の皆様と一緒に学べるのを楽しみにしています。

論文：「“家族”の不在と喪失がもたらすもの—アダルト・チルドレンだと訴える30代女性との面接過程から—」『大阪経済大学心理臨床センター紀要』第16号、2023

「映画『サイドカーに犬』に見る、大人のまなざしと「ほどよい母親」に出会うこと—あるはずのものがなく、ないかもしれないものがあること—」『大阪経済大学心理臨床センター紀要』第15号、2021

「大学が地域の子育て支援にかかわる意義と今後の課題—大学の開放スペースを利用した出張おやこひろば開催を通して—」『大阪経済大学心理臨床センター紀要』第14号、2020

「児童養護施設に入所する子どもが抱える問題とその情緒的傾向、および心理士の役割」『大阪経済大学心理臨床センター紀要』第11号、2017

著書： 親と離れて暮らす子どものための絵本シリーズ『ルーファスのあんしんできるばしょ』（訳）誠信書房、2019
『子どものこころの発達を支えるもの』（分担訳）誠信書房、2016
『乳児観察と調査・研究』（分担訳）創元社、2015

磯部 晶子（非常勤職員 臨床心理士 公認心理師）

武庫川女子大学大学院文学研究科心理臨床学専攻を修了し、2002年に臨床心理士資格を取得しました。

これまで、ユング心理学に基づく分析心理学的心理療法を学びながら、中学校高校のカウンセリングルームや学生相談室、民間のカウンセリング施設においてカウンセリングを行ってきました。症状は困ったものというだけではなく、その人の生き方でもあるという側面を大切にしながら、院生の皆さんと一緒に考え、理解を深めていけたらと思います。

小槻 智之（非常勤職員 臨床心理士 公認心理師）

京都ノートルダム女子大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻を修了し、2010年に臨床心理士資格を取得しました。その後は、教育センターの相談員やスクールカウンセラー、精神保健福祉センター相談員、精神科クリニックのカウンセラーとして心理の仕事に携わってきました。院生の皆さんとは、ケースについて話し合い一緒に考える時間が持てることを楽しみにしています。

堀内 瞳（非常勤職員 臨床心理士 公認心理師）

大阪経済大学大学院人間科学研究科臨床人間心理専攻を修了し、2011年4月に臨床心理士の資格を取得しました。精神分析的な心理療法を専門とし、児童養護施設や総合病院の精神科などで勤務してきました。

心理臨床センターでは、発達相談サービスを担当しています。臨床心理士としては、まだまだこれからですが、皆様と一緒に学び、成長していきたいと思っています。

論文：「相貌失認が疑われる患者のロールシャッハ・テストの検討」『大阪経済大学心理臨床センター紀要』第8号、2014

「大阪経済大学心理臨床センターにおけるGBOM導入の試み」『大阪経大会 大阪経大論集』第65巻第6号、2015

著書：『子どものこころの発達を支えるもの』（分担訳）誠信書房、2016

松野 輝美（非常勤職員 臨床心理士 公認心理師）

甲南大学人文科学研究科修士課程“人間と心コース”を修了し 1998 年に臨床心理士資格を取得しました。地域の教育相談、発達相談、女性相談の他、総合病院で EAP や緩和ケアの仕事をしてきました。臨床の場で起こる「体験」をととても大切にしています。ご一緒できるのを楽しみにしています。

論文：「心理臨床実習のプロセスを促進するサポートの在り方～しんどさの体験の検討から～」(共著)『奈良大学臨床心理クリニック紀要』第 13 号、2021

著書：『がん患者は家に帰ろう』（分担執筆）エピック、1998

村井 和美（事務職員）

2015年度より本学人間科学研究科附属心理臨床センター事務スタッフとして勤務。

受付業務を担当しており、院生の皆さまの学内実習のお手伝いをしております。

最後に～教員から皆さんへ高く明確な熱意とプロ意識をもつあなたへ

心理臨床家のトレーニングにおいては、面接技術を繰り返し練習することと、理論を実践に即したかたちで学ぶことが必須です。それに加え、訓練生自身の人間的成長もとても大切です。

わたしたちの大学院は、質の高いハイレベルな欧米のシステムを取り入れたトレーニング課程など、その機会を豊富に提供します。

プロフェッショナルになるためのトレーニングに、志の高い熱意をもって積極的に取り組む方々との出会いを心待ちにしています。

もし、あなたがそういう志をもち、相当な努力を自ら求めて実力をつけたいと願うなら、ぜひ本学を志望校として検討してください。そのようなあなたを歓迎します。

ご質問などは、大学院事務室（in@osaka-ue.ac.jp）へお問い合わせください。